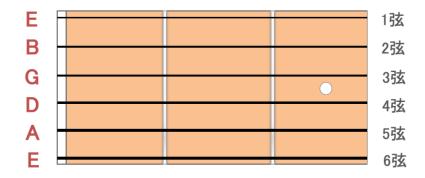
ギターのチューニング



レギュラーチューニング

レギュラーチューニング

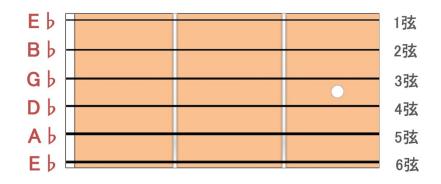


3弦と2弦の間だけ長3度音程、他は全て完全4度でチューニングされる。



変則チューニング①

半音下げチューニング

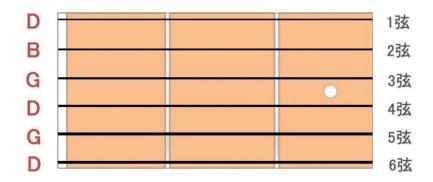


全弦を半音下げたチューニング。レギュラーより重たいサウンドになるので、 ハードロック系で使われたり、ボーカリストの高音歌唱の負担を 軽減する為に使われることが多い。



変則チューニング②

オープンGチューニング

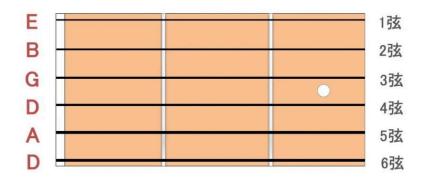


開放弦を弾いた時に、Gの和音になるようにチューニングされる。 他にもオープンチューニングはあるがGが最も代表的。 指1本で全弦を抑えると他のコードも鳴らせる。 3コード主体のロックやブルースで好んで使われる。 ローリングストーンズのキースリチャーズの使用でも有名。



変則チューニング③

ドロップDチューニング

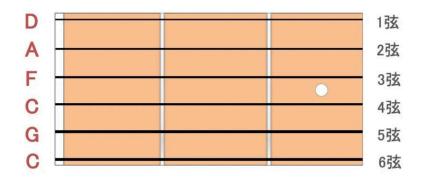


レギュラーから6弦だけ1音下げたチューニング。リフを弾く時に重量感が出せる。 6弦と5弦が完全5度のインターバルになる為、パワーコード(低音弦をルートと 5度のみで弾く演奏法)が指1本で押さえられ、素早いリフが弾きやすい。



変則チューニング4

ドロップCチューニング

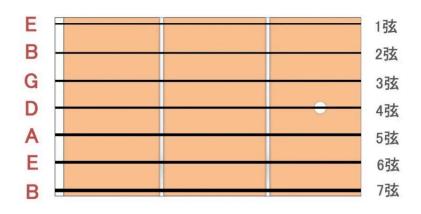


ドロップDから全弦1音下げたチューニング。かなりへヴィなサウンドになる。 通常の弦だとテンション(弦の張力)が足りないので太めの弦を張る。 7弦ギター(最低音=B)と近い音域ながら6弦の感覚で弾けるため 愛用するギタリストも多い。



7弦ギターのチューニング①

7弦レギュラーチューニング



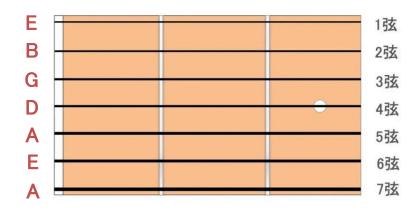
6弦の最低音Eより4度低いBを7弦目に足したチューニング。 7弦と6弦のインターバルは他の弦同様4度なので、6弦と近い響き方ながら、 相当へヴィなサウンドになる。

90年代以降のメタル~メタルコア等のバンドではよく使われる。



7弦ギターのチューニング②

7弦ドロップAチューニング

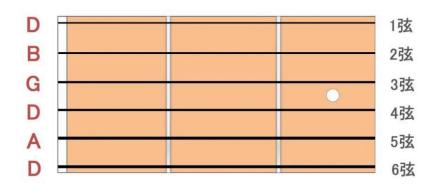


7弦でも6弦同様ドロップチューニングも使われる。 レギュラーから7弦だけ1音下げたのがこのドロップA。 更に全弦半音下げのドロップAbもよく使われる。 もはやベース並の低音域で極悪なサウンド。 昨今のメタルコアでは割とよく聞かれる



アコースティックギターの変則チューニング(1)

ダブルドロップDチューニング

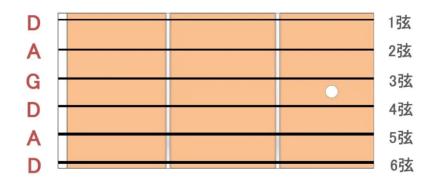


ドロップDから更に1弦も1音下げてDにしたチューニング。 ウエストコースト系のアーティストやジミーペイジら ロック系のミュージシャンにも愛用された。 開放弦をうまく使うと独特な民族音楽っぽさを出すことができる。



アコースティックギターの変則チューニング②

DADGAD(ダドガド)チューニング



ダブルドロップDから更に2弦も1音下げてAにしたチューニング。 開放弦がDsus4コードになっていること、多くの弦が同じ音になっていることで 独特な響き方をする。ダブルドロップDより更に民族的、アイリッシュなサウンドを 出しやすい。

マイケルヘッジス、押尾コータローといったソロギター系のアーティストによく愛用されている。



カポタストの使用



ギターではキーによってはセーハコード(人差し指で6本すべてを抑えた状態でコードを押さえる型)を 多用せざるを得ない難しいキーがあるが、カポタスト(略して「カポ」と呼ばれる)を使って移調すれば 簡易化出来る。

フレットの左側に装着することでそのフレットが「Oフレット(=開放状態)」となり、 例えば1フレットに装着すると全弦半音上がる。

ギターで「Db」キーを演奏する場合、1フレットにカポタスト装着することで半音移調され、「C」のキーと同じ押さえ方で演奏することができるようになる。



アレンジ面でのカポタストの使用

アコースティックギターを2本でのアンサンブルの場合、 2本とも同じキーで演奏するのではなく、片方にカポタストを装着して 別のキーで演奏することでハモるような形となり、 広がりのあるアンサンブルを作ることができる。

例えば1本は「C」のキーで演奏、もう1本は5フレットにカポタストをつけて「G」のキーで演奏するといったことが可能。

また、音域が高くなると同じキーでも響き方が変わる為、響きを変える為に使われることもある。ポールサイモン「スカボロー・フェア」やジョージハリスン「ヒア・カムズ・ザ・サン」等での使用が有名。

